

2015



平成 27 年 9 月 発行

No. 98

社団法人 日本山岳会秋田支部

秋田市泉菅野
1-2-14 鈴木方

TEL・FAX 018(823)2708

発行者 今野 昌雄

編集者 鈴木 裕子

鈴木幸雄氏 追悼

鈴木幸雄さんを偲ぶ

佐藤 博

鈴木幸雄さんが逝って早くも一年半が過ぎようとしています。

幸雄さんとの出会いは、昭和三十九年に私が秋田運送に入社して一年ほど過ぎてからのことだったと思います。会社が東京・秋田間の路線を計画し、自動車課と路線課が一緒になり、同じ職場に配属になりました。

初めて鈴木さんと一緒に配車になったのは東京で、十二、十三時間を交代で運転しました。運転しながらの会話の中で、鈴木さんが山岳会「アキタルパインクラブ」に所属し、太平山を中心に県内外の登山で活動していることを伺いました。その後、国民体育大会、県民大会等の選手や役員としても活躍していることを知りました。

翌年、鈴木さんと同会員の松井征光さんの二人に誘われて、残雪の太平山に登ることになりました。まともな雪山の装備等がないので、二人から借りての登山だったと思います。中腹からの残雪と藪漕ぎは苦労しましたが、残雪に映える太平山の景色は、今も目に焼き付いています。斜面でピッケル、ザイルの使い方を教えていただきました。それが、私が現在も山歩きを続



けることのきっかけとなりました。

昭和四十七年の「県民体育大会」に、アルパインクラブの代表として亡き中島富雄さんたちと一緒に、虎毛山・高松岳縦走部門に参加させていただきました。当時の山岳連盟の高田俊雄会長は、幸雄さんの出場を喜び、激励してくれました。山登りを教えてくださった鈴木

さんとの良い思い出になりました。

職場は約十年間一緒でした。当時十三号線を始めとする国道は、都市部を除けばほとんどが未舗装でよくパンクや故障をしました。冬は、除雪体制も整っていない上、冬タイヤ等もなく、凍てつく夜空の下でふるえながら前・後輪にチェーンを装着しました。特に、関山峠と雄勝峠越えは悪路で渋滞し、苦労しました。何時間も動かず、荷主の指定時間まで走れるか心配したこともありましたが、鈴木さんは動じませんでした。

十三号線と平行する国鉄線を蒸気機関車の二重連とトラックがゆつくりと走る風景には、一緒に感動もしました。鈴木さんは、写真を撮るためにビデオカメラでその姿を追いつけたこともあり、二人とも忙しく、そのビデオと一緒に見ることもできなかったこ

とが、今思うと残念でなりません。その後、国道・国鉄線も順次改良整備され、年々快適な運転が出来るようになり、全国を走り回りました。

鈴木さんは、正義感にあふれる方でした。四十五年ほど前のまだ寒い三月中旬、通りがかった千秋公園のお堀でボートが転覆し、二人の中学生が溺れているのを見つけ、身を切るような冷たい池に飛び込み、二人を救助しました。その行為は高く評価され、各方面から賞賛と激励の手紙があつたと聞いております。

また、信仰心も厚く、三吉神社の多忙期には、先頭になり助勢を呼びかけて協力しました。山の神社社の鳥居が、朽ちかけたのを見て、材料の準備から制作まで一人で行い、岳友も協力して交代で担ぎ上げ、見事に建立しました。梵天キチガイと言われるほど、梵天との関わりは深く、新聞でも「ボンキチ」と題し、時の人として紹介もされてい

ました。梵天奉納は、里宮のみならず、太平山の山頂の奥宮へ、今野俊一氏と私の三人で九年間奉納しました。山開き前のイベントとして定着し、多くの山仲間がこの日は登山口で待つて協力してくれました。開山祭の山頂で、進藤義声さんの三吉節と鈴木さんの妙技で、大勢の登山者達が盛り上がりしました。その妙技は素晴らしく、鈴木さんの右に出る方はいなかったと思います。もう見られないと思うと寂しい限りです。鈴木さん自身は、「何の趣味もなく、ただ一つの楽しみは山登り」と言っていました。山仲間には、言葉は悪いですが、クサレタマクラとも言われる

ほどの多趣味でした。

山登りの間に俳句を読み続け、NHKに投稿し、優秀賞の榮譽に輝いたこと、今も忘れられません。替え歌も得意で、宴会では「山歌のメロディ」で披露してくれたこともありました。

山岳連盟の役員からも運転の腕を買われ、国体の出場選手や監督、岳連役員の訓練にも、二人で交代しながら走りました。遠くは、親不知を越え北陸道を滋賀まで走った時、沿道に咲く曼珠沙華を見ながらさりげなく鈴木さんが詠んだ句です、

「近江路は、今が盛りと 曼珠沙華」

秋田県山岳連盟の高校山岳部の監督を中心とした冬の富士山登山と冬山訓練のため、マイクローパスを運転して参加したこともありました。

鈴木さんは、海外の山にも多く登られ、中国・台湾・韓国の山々を走破しました。韓国登山には奥様も同行し、一緒に山頂を極めました。

数年前に体調を崩され、入退院を繰り返しました。亡くなる一ヶ月ほど前にお見舞いしたところ、「博、俺はもうダメだ」とつぶやくので、「元氣出せよ」と励ましたのが、鈴木さんとの最後の会話となりました。

五十年間の長い間の思い出は、あまりにも多く、語り尽くすことが出来ません。公私にわたり、長い間お世話になり、本当に感謝しております。

今頃は、先に旅立だった先輩諸氏と山々を登り、句を詠んでいるのかもしれない。

安らかに眠られるよう、心からお祈り申し上げます。(白掌)

鈴木幸雄さんを想う

佐々木 民 秀

人一倍の世話好きで、ユーモア溢れる芸達者な鈴木幸雄さんが逝ってからも一年半が過ぎ去った。

鈴木さんと山行を共にしたのは、昭和四十年代の初め頃であったと思う。

当時、太平山を主体として奉仕活動していた太平山警備委員会で、山頂に建つ社殿や施設、登山道の整備などを、我々仲間と共に精力的に活動していた事が想いだされる。

鈴木さんは、特に職人技に優れており、参道の鳥居や、登山者の失火で再建された奥御殿への手造りの額、はては梵天を奉納するなど、物事に良く気づくアイディアマンであった。

古くから所属していたアキタ・アルパイン・クラブ時代では、県民体育大会に選手や役員として出場したり、秋田市制百周年記念事業であった中国・アルチン登山にも参加するなど、長い間幅広く登山活動に情熱を燃やしてきた実力のある山男でもあった。

平成三年、秋田支部に入会（会員番号一〇九七一）し、翌年の平成四年、秋田支部初の海外登山「韓国・智異山」には奥さんを伴って参加、かつて登った智異山を愛妻にも登らせたかったのであらう。

その時、智異山山頂に姉妹山の友好印として、太平山の石を奉納してくださったのも鈴木さんであった。

そして、その翌々年（平成六年）に実施した台湾・南湖大山にも参加して

頂いたが、運悪く登山中に体調を崩し途中で断念。以後、登山活動の中止を余儀なくされてしまった事は返す返すも残念であった事と思う。

鈴木さんは、8ミリ撮影、漢詩や俳句、替え歌などにも優れ、秋田奇々怪会会長に推挙されるなど、幅広い趣味の世界を謳歌され、悔いのない人生であったと思う。



平成4年11月9日 韓国・智異山頂上で
自作の登頂幕を飾る鈴木ご夫妻
妻ミツさん 鈴木幸雄さん

ここに、支部設立五〇周年時に開封されたタイムカプセルに託した鈴木さんの作品と、平成十二年度NHK全国俳句大会で入選された俳句と、それに南湖大山の想いを綴った漢詩を紹介し、おしどり夫婦の手本であった鈴木幸雄さんのご冥福を祈りたい。(白掌)

タイムカプセル

(月の砂漠の替え歌)

月の山道とぼとぼと
重いザックを背中に背負い
ブナの林の中を行く
黄色いシャツの山男

雨降る日も風の日も
雪降る日もただ一人
雲間に見える峰を指し
黙って登って行きました

星の降る夜は思い出す
遠い昔の山の友
ほのかなランプの灯の下で
呑んで明かしたあの友を
外は吹雪の山小屋で

NHK全国俳句大会入選

カタクリの
花よけて行く 登山靴

南湖峰上満月詩

南湖大山照満月
雲稜山莊松影見
阿美族美女手繼
山男達踊輪中人
花蓮樂過一夜忘
太魯閣溪谷絶景
大理石美我感佩
何日来玉山登頂
山友誓涙台湾去
国帰途中運上暹
機窓見富士雪峰
目閉林氏笑顔浮
久郷婦妻子我迎



太平山山開き清掃 登山に協力

六月十四日(日)、太平山県立公園整備促進地域協議会による恒例の「太平山山開き清掃登山」が行われた。秋田市の一般参加者約三十名、そのサポートとして協力。

今年はヒメシヤガの開花が早く、すっかり散っていたが、ブナの新緑が輝いていて、登山者は大変喜んでいました。山頂にある奥宮社殿で安全登山の祈願。記念撮影の後下山。雨が心配される空模様であったが、なんとか持ちこたえてくれた。

多少の遅れもあったが、落伍者もなく、全員無事に駐車場に到着。

市民登山に先立ち、堀井副支部長を中心に、秋田支部公益的事業の一環として、登山道に「七曲」等の標識を設置した。

昨年設置した標識と共に登山者からは、「位置関係がはつきりわかりやすい」、「通称を初めて知った」との声もあり、好評だ。



堀井副支部長

秋田支部参加者

佐々木民秀 三浦真六 堀井弘
鎌田倫夫 安藤金栄 石川祐子
鈴木裕子 若月寿 長岡幸則
佐々木長秀 佐々木悦子
藤田正義 佐藤英賀

◎川島会員の 搜索について協議

七月二十二日午前十時からアルヴェ市民交流室で開催。

・昨年、部名垂沢入山口に設置した「情報提供願いの立札が雪で壊れたので、田口会員が新たに設置した。
・今野支部長が五月に二度入山。
佐々木(長)委員が仙北署に連絡したこと等の報告。
・今後の対応について協議。

出席者

今野(昌) 佐々木(民)
鈴木(裕) 佐々木(長)



「自然保護全国集会」参加報告

佐々木 長 秀

七月十一日、十二日の二日間、東京都青梅市で、日本山岳会自然保護全国集会が開催された。会場の「かんぼの宿・青梅」には、各支部の代表者約一〇〇名が集まり、秋田支部からは、福田光子会員と佐々木長秀、それに大船武彦会員(東京多摩支部)が参加した。

自然保護委員会は、一九六四年に設立され、今年が五〇年の節目の年である。従って、集会のテーマを「自然保護委員会のおかげを考えると」とし、日本山岳会東京多摩支部との共催で開かれたものである。

内容は、十一日が一〇時から「支部報告」、十三時から「全体集会(基調講演・パネルディスカッション)」、十六時三〇分から「大懇親会」であり、十二日は「記念山行(フィールドスタディ)」である。

基調講演は、辻村千尋氏(日本自然保護協会)による、「南アルプスをつく、リニア新幹線の自然破壊について」であった。さまざまな環境アセス、活断層を横切る大工事、強力な電磁波による人体や環境への影響、などの問題点が指摘され、私のこれまでの認識の甘さを痛感する。

「パネルディスカッション」では、尾瀬の自然保護、スノーピーク林道建設、白山山地と峰越林道、スキー場開発、イヌワシの保護など、問題点を指摘し連

動を進展させ、多くの成果をあげてきた。今後は、こうした取組みに加えて、「山の日」が制定されたことを期に、自然に親しみながら自然保護の重要性を知ってもらう、啓蒙活動が重要な役割になるのではないかと、などの発言が出された。

佐々木(長) 福田 大船
会場の「かんぼの宿」前で

「支部報告」では、会員の高齢化が進んでおり、人づくりの計画が必要だ。各種講座や講習会の開催に力を入れていく。フラワートレッキングや、花を観る会などを企画し、会員以外の参加者にも呼びかけていく。

また、会員の「高齢化と担い手不足」を嘆くだけでなく、山への関心の高まりの中で、今できることを計画し、活動を強化することの重要性を強調する発言が多かった。

また秋田支部としては、支部自然保

護委員会の現状・堀井副支部長を中心にした活動・自然保護に関わる各種公益的事業・今後の課題と活動の方向を内容とした「レポート」を事前に提出し、全体討論に参加した。

十二日の「記念山行」は、①大岳山コース、②高尾の森見学コース、③横沢入コース、の三コースがある。福田会員は、②コース。私は、①コース。大船会員は、体調が悪く不参加であった。

私の参加した大岳山（おおたけさん）は、東京都の奥多摩山域にあり、標高二六七mの山である。特徴のある山容から、奥多摩のシンボリックな存在となっている。

また、古くから山岳信仰の対象となり、栄えた山である。「日本二〇〇名山」・「花の一〇〇名山」の一つにも数えられている。

今回の登山路は、庶民の御岳（みたけ）詣で賑わった御師（おし）集落を出発点とし、御岳神社・芥場（あくば）峠・大岳山荘・大岳山頂を往復するルートである。所要時間は休憩時間も含め約六時間であるが、山登りの経験者が中心であったため、実質的には五時間弱であった。

整備された登山道と、好天にも恵まれ、実に快適な山行であった。

特に、多摩支部自然保護委員会のメンバーによる、草花や樹木の詳しい説明があり、「自然観察会」のやり方について学ぶことができ、私にとって大変に有意義な山行となった。

— 本会総会開催 —

平成二十七年通常総会が、六月二十日午後二時から、東京四谷の主婦会館プラザエフで開催され、今野支部長出席。

平成二十六年度の事業報告、決算報告が承認され、二十七年事業計画及び収支予算の報告があった。

本年は役員改選が行われ、理事、監事は提案通りに承認された。

（会報「山」七月号参照）

なお、会長、副会長、常務理事は、「総会で選任された理事の中から理事会の決議によって理事の中から選出する」定款に従って、次のように選出された。

本会新役員

会長 小林政志
副会長 吉川正幸 大久保晴美
常務理事 山田和人 佐藤 守
神長幹雄

会員数情報

平成二十六年年度末

◎会員数 五〇三六名

名誉会員 十二名

永年会員 三四七名

終身会員 七四名

通常会員 四三三九名

青年会員・他 二六四名

秋田支部会員数 六十二名

（平成二十六年四月一日現在）

会務報告

◎東北・北海道地区集会

担当者会議

◎六月二十五日 九時から泉コミニティセンターで開催。

二十八年度に秋田支部主管で開催される、東北・北海道地区集会について協議。

開催地 森吉地区 桃洞の滝周辺
の散策を中心としてコースを考える。
開催日時は七月下旬等を協議。

出席者

今野（昌） 鈴木（裕） 堀井 鎌田
三浦（眞） 佐々木（長）

◎七月十七日 奥森吉地域下見

午前六時、道の駅五城目出発。

旧くまげら保護センター野生鳥獣センター、森吉山荘等視察、見学。
桃洞の滝、赤水溪谷等現地調査。

出席者 三浦（眞） 鎌田 安藤（金）

佐々木（長）

◎八月十九日 森吉山下見。

午前六時、道の駅五城目出発。

ヒバクラコース、ゴンドラコースの歩道状況、歩行時間。

秋田から現地までのおおよその時間、宿舎からゴンドラ乗り場までの時間等の確認。

記念品について検討
パンフレットの手配等

出席者 三浦（眞） 鈴木（裕） 鎌田

佐藤（博） 安藤（金）

行事参加報告

◎中央地区山岳協議会総会

六月二十七日午後六時三十分から、三吉神社斎館で開催。十二団体から十五名出席。当支部から佐々木（民）、堀井出席。事業・決算の報告や事業・予算案を審議し、其々承認。

訃報

元会員 吉川信市氏は、病氣療養のところ、四月三日逝去されました。

（享年八十六才）

ご冥福をお祈り致します。
吉川氏は昭和三十五年入会（会員番号三八一九）、海外赴任が多く途中退会。平成十五年復活会員となったが、病氣のため再退会。

吉川氏の考案で作製されたモリヤピッケルは、日本山岳会マナスル登山隊や南極越冬隊で使用されたことで有名。晩年にモリヤピッケルの所在を調査し、纏めている

著書

「水を飲む人掘る人」

「我が青春の山日記」

「我が旅の始まりはエチオピアから」

訂正

会報九十七号

・総会ご芳志 五千円に今野昌雄を加える。

・県岳連総会出席者に、高橋守三浦俊雄を加える